

近代日本における音楽理論教育と和声理論書出版の歴史的展開

——東京音楽学校の和声教育を軸として——

仲 辻 真 帆

はじめに

1879（明治12）年に音楽取調掛が設置されて以降、その後身である東京音楽学校（1887年設立、現在の東京藝術大学）をはじめ日本各地に音楽専門教育機関が創設されてきた。東洋音楽学校（1907年設立、現在の東京音楽大学）や大阪音楽学校（1915年設立、現在の大阪音楽大学）などに関しては、その創設者の理念や活動を含めた歴史的研究も進められつつある。しかし、明治期から昭和初期にかけて音楽学校で実際にどのような教材が用いられ、いかなる方法で教育が実践されてきたのかについて、音楽理論に焦点を絞った詳細な研究はごくわずかしかない。そこで本研究では、音楽取調掛・東京音楽学校における音楽理論教育の実態について、特に使用教材の観点から論考を進めてゆく。

音楽取調掛が発行した音楽書として『音楽問答』（J. Jousse 著、瀧村小太郎訳、神津専三郎校閲、1883年）、『楽典』（J. Callcott 著、神津元訳、神津専三郎校訂、1883年）、『音楽指南』（L. W. Mason 著、内田彌一訳、1884年）等が比較的よく知られている。『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻（音楽之友社、1987年）や『音楽教育成立への軌跡』（音楽之友社、1976年）等でも上記の出版物に関する記述があり、音楽取調掛・東京音楽学校のカリキュラムや教育的取り組みも明らかにされてきたが、音楽理論の教育内容を当時出版されていた理論書とあわせて考察することや各書の記載事項の比較検討は未だ充分になされていない。本論文では明治期から昭和初期に発行された和声理論の著書・訳書についても一覧化し、欧米の理論の導入状況や訳語の変遷¹にも注意を向ける。

近代日本における「音楽理論」という用語に関して、明治期の『音楽理論百ヶ條』（鈴木米次郎編、上真行閲、有正館、1889年）や『音楽理論』（鳥居忱著、金港堂、1891年）のように音程、拍子、調子、音階、楽語といった現在の「楽典」に相当するものとして使用された事例もあるが、大正期の『西洋音楽概論』（辻莊一著、大村書店、1924年）の「音楽理論」の項目には和声論や対位法に関する詳しい記述も見受けられる。こうした点を考慮に入れ、本論文では「音楽理論」そのものの用語や概念の歴史の変容にも留意する。

『ニューグローヴ世界音楽大事典』の「音楽理論」の項目では、2世紀にアリストイデス・

クインティリアヌスが示した枠組みを基に「A. 科学」「B. 技術」「C. 批評」「D. 歴史」の各分野から成る「Ⅰ. 理論部門」と、「A. 創作」「B. 教育」「C. 演奏」「D. 機能」から成る「Ⅱ. 実践部門」が提示されている。アリストテレスが秩序立てた領域全体が広義には「理論的」で、ここでの「理論部門」が「今日ならば『作曲以前の理論』とでも呼ぶべきもの」と規定したうえで、「ある特定の時代に音楽理論の役割を一般にどうとらえていたか」に注意する必要性が指摘されていると同時に、「音楽理論を歴史的考察から切り離すこと」はできないと述べられている²。本研究は、上記「Ⅱ. 実践部門」AとBに関わる部分を扱うが、具体的には近代日本の音楽理論教育について歴史的視座から考察するもので、特にその草創期から教授されていた和声論に主眼を置く。本論文では明治10年代から開始された和声教育と明治20年代から徐々に活発化する和声理論書出版の歴史的展開を明らかにする。

1. 日本における音楽理論教育の始まり——19世紀後期の教育状況

1-1. 音楽学校における授業科目

1879（明治12）年、文部省内に音楽取調掛が新設され、翌年から日本における近代的な教育制度に基づく音楽教育が実施されることになった。1881（明治14）年10月作成の「音楽取調所授業課目」は音楽取調掛の最も古いカリキュラムで、一通りの伝習を速やかに終え教員となる「長年生」と、伝習の完成を期す「少年生」という二つのコースから成る³。「長年生」は高等唱歌、胡弓、箏、調絃、洋琴、唱歌温習、和声学講義、唱歌教授法、複習、「少年生」は唱歌、洋琴、唱歌温習、複習を履修することになっていた。1881年の最初のカリキュラムですでに音楽理論科目の和声学講義が含まれていたことがわかる。

音楽取調掛の教育状況については次項から詳述するため、本項では私立の音楽学校の当時のカリキュラムを参照しておきたい。現存する私立音楽大学の中で最も創立年が早いのは東洋音楽学校である。1907（明治40）年に鈴木米次郎によって設立され、今日の東京音楽大学へと発展した。開学時のカリキュラム⁴を参照すると、学科目として倫理、独唱歌、合唱歌、楽器、楽典、和声学、対位法、楽式、楽曲編成法、音楽史、音響学、歌文、外国語、他随意科目（審美学、教育学、教授法）があり、音楽理論関連に注目すると、第1学年で楽典、第2・第3学年で和声学、第3学年で対位法や楽式を学ぶことになっている。

1915（大正4）年に永井幸次が設立した大阪音楽学校は、1958（昭和33）年に大阪音楽大学となり、以後も校史の整理・検討が進められてきた。『大阪音楽大学70年史』には1933（昭和8）年の同校高等科の授業内容が掲載されており、4年間で修身、専門（声楽、器楽）、副科ピアノ、唱歌、音楽通論、和声学、作曲学、音響学、音楽史、教育学、心理学、美学、国語、外国語、合唱、合奏を学ぶことになっていたようで、「永井幸次講述 和聲學」と表紙に記されたガリ版刷りのテキストも残されている⁵。和声学は第二学年からの履修科

目となっており、その授業内容は第二学年で「三和音転回、反覆進行、静止法、七ノ和音転回」、第三学年で「掛留音、転調変化音」、第四学年で「旋律調和、伴奏楽譜」とされていた。

1-2. 音楽取調掛および東京音楽学校における音楽理論教育

音楽取調掛および東京音楽学校については、公文書や先行研究の蓄積があるため、教育状況に関しても確認できる事項が多い。「音楽取調所授業課目」によれば、和声学の指導にあたったのはルーサー・ホワイトニング・メーソン Luther Whiting Mason (1818～1896) で、毎週火曜・木曜・土曜にそれぞれ1時間ずつ講義が実施されていた⁶。先行研究を参照すると、当時、L. W. メーソンが参照したと考えられているのがジョン・パイク・フラ John Pyke Hullah (1812～1884) の著書 *Grammar of Musical Harmony* (London: John W. Parker and Son, 1852) で、その訳書『西洋音楽調和要法』が「音楽取調掛の和声教科書としてこれ以後使われた」という記述がある⁷。ただし、L. W. メーソンが「*Grammar of Musical Harmony* を参考資料として活用したとしても、直接の教科書としては利用しなかった」という指摘や、同書が使用されたのはL. W. メーソンの帰国後とする著述もあり⁸、誰がどの段階でフラの著書およびその訳書を使用したかについては不詳である。まずここで確認しておきたいことは、近代日本の音楽理論教育において、最初に米英の和声学が教授されていたという事実である。実際にL. W. メーソンによる和声学の教授内容⁹やJ. P. フラが記した *Grammar of Musical Harmony* を参照すると、ドイツの機能และ声論への言及はなく、例えば譜例にTDS表記が見受けられないなど、現代日本の和声教育と異なる様相を呈している。

和声論以外も含めた音楽理論の教育史について考察するうえで明治後期から様々な欧米の音楽書が訳出されていたことにも留意したい。先行研究¹⁰では音楽取調掛の「教材」として活用された音楽書として以下の7点が挙げられている。下記4～7は未刊であるが、いずれも明治時代に翻訳・教材化されていた点で、次章で述べる理論書と同様に重要である。

1. 『樂典』 Callcott, John. *Musical Grammar*. 神津元訳、神津専三郎校訂、1883年。
2. 『音楽指南』 Mason, Luther Whiting. *National Music Teacher*. 内田彌一訳、1884年。
3. 『音楽問答』 Jousse, John. *Catechism of Music*. 瀧村小太郎訳、神津専三郎校閲、1883年。
4. 『西洋音楽小解』 *Chambers's Encyclopaedia*. ほか、瀧村小太郎訳。
5. 『音楽歴史』 Hunt, Bonavia. *A Concise History of Music*. 内田彌一訳。
6. 『西洋音楽調和要法』 Hullah, John Pyke. *Grammar of Musical Harmony*. 瀧村小太郎訳。
7. 『唱歌法』 Emerson, Luther Orlando. *Vocal Method*. 瀧村小太郎訳。

2. 明治～昭和初期の音楽取調掛・東京音楽学校の和声教育

本章では、明治～昭和初期に音楽取調掛および東京音楽学校で教員・学生が参照していた和声理論書について述べる。当時すでに複数の和声理論書が刊行されていたが、ここでは音楽取調掛・東京音楽学校で実際に使用・参照されていたことが裏付けられる書籍のみを挙げる。また、東京音楽学校本科に作曲部が新設された1931（昭和6）年以降の状況については拙論¹¹で記述しているため、本論文では詳述しない。

【表1】は本章で扱う和声理論書の目次である。表に挙げた5つの資料について、以下で構成や特徴を述べる。

2-1. 『和聲學初歩』

1896（明治29）年に普及社から発行された『和聲學初歩』については、同書1頁を参照すれば神津仙三郎¹²が「訳講」し上真行と辻則承が「筆記」した記録であることがわかる。原著はステファン・エメリー Stephen Albert Emery（1841～1891）の *Elements of Harmony*（Bonston, A. P. Schmidt, 1879）である。

本書は「明治から大正まで、音楽取調掛（所）、東京音楽学校において活用された」¹³とみなされており、近代日本の和声学の教育・受容において重要な資料の一つであると考えられる。

『和聲學初歩』は全80章、255頁から成る。音程の理解に始まり、三和音やその展開、属七や減七の和音を学び、後半で転調や非和声音について学ぶという流れは、前章で言及したL. W. メーソンによる和声学と類似している。

『和聲學初歩』の特徴として、全体の約2割が「^マコーラル（高等禮拜樂）調和」、すなわちコーラルの和声について記されていることが挙げられる。経過音や倚音を有する旋律を和声との関連から検討することにより、和声学の理解・教育に資することが目指されているのである。

2-2. 『和聲學通解』（『音楽』所収）

『和聲學通解』は、東京音楽学校学友会の発行誌『音楽』¹⁴に掲載された島崎赤太郎による論考である。1910（明治43）年6月5日発行の1巻5号からほぼ毎号連載され、1912（大正1）年10月10日発行の3巻10号まで22回にわたり和声学の記述が続いた。

執筆者の島崎は1904（明治37）年からライプツィヒ音楽院 Koengliches Konservatorium der Musik zu Leipzig に留学し、ザーロモン・ヤーダスゾーン Salomon Jadassohn（1831～1902）の理論を日本で翻訳して紹介した人物とされている¹⁵。帰国後は東京音楽学校で教授となり、和声学を含む音楽理論およびオルガン音楽の教育にあたった。

【表1】 明治～昭和初期の音楽教育において使用された和声理論書の目次

和聲學初歩	和聲學通解
第1章 音程	第一章 甲、調の諸和音と調の主和音
第2章 音階	第一節 主音の三和音
第3章 三和音	第二節 属三和音
第4章 進行	第三節 轉回及び反覆
第5章 隠伏第八音、同第五音、及同音	第四節 四聲音
第6章 三和音ノ転回	第五節 四聲音に於ける三個の主和音の結合
第7章 結尾ノ事	第六節 和音の上下聲音の位置の變換
第8章 第七ノ和絃、第七ノ和絃解決ノ規則	第七節 音階の和聲
第9章 第七ノ和絃ノ規則	第八節 三個の主和音の用法
第10章 第七ノ和絃ノ転回	第九節 密接及び疎開和聲
第11章 第二種ノ第七ノ和絃	第十節 各聲音の名稱、聲域、及び其用法
第12章 連続第七ノ和絃、連続第七ノ和絃ノ規則	第十一節 疎開和聲の使用方法
第13章 減第七ノ和絃	第十二節 和音の轉回
第14章 減第七ノ和絃ノ規則	第二章 乙、不協和主和音
第15章 第二種ノ第七ノ和絃ノ転回	第一節 上属第七の和音或は第五度の七の和音
第16章 静止法	第二節 第五度の七の和絃の轉回
第17章 第七音ノ例外処分法	第三節 第五度の七の和音使用法
第18章 単一ナル音ノ半音階的变化	第四節 終止法
第19章 伊太利的、仏蘭西的、日耳曼的、 及ヒ那不列の第六音	第五節 第五度の七の和音及主調四六の和音
第20章 伊太利的、仏蘭西的、日耳曼的、 及ヒ那不列の第六音統	第六節 九の和音
第21章 転調	第七節 短及減の七の和音
第22～28章 転調統	第八節 減の三和音
第29章 掛留法	第九節 従属和音
第30～32章 掛留法統	第十節 従属和音の轉回
第33章 連合譜表用法	第十一節 長短兩調に於ける第二度の従属三和音
第34～38章 連合譜表用法統	第十二節 長調に於ける第三度の従属三和音
第39章 音部ノ事	第十三節 従属三和音の規則外使用
第40章 疎開和声	第十四節 第二度の従属七の和音
第41章 疎開和声統	第三章
第42章 倚音、經過音、變過音、跳越音、預期音、 オルガンポイント即チペダルポイント 保持音	第一節 数字附低音
第43章 旋律調和	第二節 和音外の諸音
第44～60章	第三節 單純複音經過音
第61章 ダブル、シャント調和	第四節 重複經過音
第62～65章 ダブル、シャント調和統	第五節 強聲部に於ける經過音
第66～80章 コーラル調和統	第四章
	第一節 掛留音
	第二節 低音に於ける掛留音
	第三節 内聲音に於ける掛留音
	第四節 掛留音の遲延解決
	第五節 掛留音の上行解決及び重複掛留音
	第六節 餘備音なき掛留音
	第七節 餘期音
	第八節 變過音
	第五章
	第一節 轉調
	第二節 音性の變換
	第三節 關係調子に至る轉調
	第四節 規則正しき轉調
	第五節 横立音
	第六節 新調の五度の七の和音の取扱につきての注意
	第七節 轉調の手段としての長及短の九の和音及減の七の和音
	第六章
	第一節 詐欺解決
	第二節 属和音の詐欺解決
	第三節 詐欺終止
	第四節 他の不協和主和音の詐欺進行
	第五節 詐欺解決に依りて起る反覆進行
	第六節 従属七の和音の詐欺解決
	第七章 變化和音或は混合和音
	第八章 短旋法の第二度の根音を半音階的半音だけ低めたる三和音
	第九章
	第一節 増の六の和音及之れに關係の和音
	第二節 増三和音
	第三節 オルガンポイント或はペダルポイント

<p>新譯律氏和聲學</p> <p>第壹編 基本和聲及び之れより派生したる和音</p> <p>第一章 長音階の三和音</p> <p>第二章 短音階の三和音</p> <p>第三章 三和音の轉回</p> <p>第四章 七の和聲 四和音</p> <p>第五章 七の和音の轉回</p> <p>第六章 副七の和聲</p> <p>第七章 副七の和音の轉回</p> <p>第八章 七の和音の種種なる連結法</p> <p>第九章 九の和音 十一の和音及び十三の和音</p> <p>第拾章 基本和聲の半音階的變化</p> <p>第拾壹章 樂曲の轉調</p> <p>第貳編 偶發性和音の構成法、和聲外の諸聲音</p> <p>第拾貳章 掛留</p> <p>第拾參章 低續音及び不動音</p> <p>第拾肆章 經過音及び變過音</p> <p>第拾伍章 經過和音</p> <p>第拾陸章 轉調の詳解</p> <p>第參編 和聲實用法、和聲に依りて正則的樂曲を作る練習</p> <p>第拾柒章 與へられたる一聲音に附する單純和聲的伴音</p> <p>第拾捌章 和聲的伴音の發展</p> <p>第拾玖章 旋律の整形</p> <p>第貳拾章 伴聲音の整形</p> <p>第貳拾壹章 三重音曲の練習</p> <p>第貳拾貳章 二重音曲の練習</p> <p>第貳拾參章 旋律的に整形せられたる一聲音部に和聲を附する事</p> <p>第貳拾肆章 五重音曲</p> <p>第貳拾伍章 六重音、七重音及び八重音曲</p> <p>第貳拾陸章 音樂的終止法の種類に就きて</p>	<p>和聲學教授書</p> <p>第一章 緒論</p> <p>第一節 音樂に理論ありや</p> <p>第二節 音樂に關係ある理論又は學問</p> <p>第三節 「メロディ」と「ハーモニイ」</p> <p>第四節 和聲法と對位法</p> <p>第五節 和聲學の規則の成立</p> <p>第二章 音程の判別</p> <p>第一節 三度音程五度音程の判別</p> <p>第二節 音程判別の不便</p> <p>第三節 音程を精密に言表はすには</p> <p>第四節 音程判別豫備項</p> <p>第五節 音階に據る音程判別</p> <p>第六節 音階に據る音程判別に就て</p> <p>第七節 音程の性質を味ふ事</p> <p>第三章 三和音の構造及名稱</p> <p>第一節 基音・三音・五音</p> <p>第二節 三和音構成に就ての用語</p> <p>第三節 七度和音・九度和音・十一度和音・十三度和音</p> <p>第四節 所用の三和音の言表はし方</p> <p>第五節 三和音の名稱=基音の音度に依て名附ける場合</p> <p>第六節 三和音の名稱=和音の性質即ち種類によつて名附ける場合</p> <p>第七節 三和音の名稱=基音の音名によつて名附ける場合</p> <p>第四章 短調の三和音</p> <p>第一節 短調の調號</p> <p>第二節 短調の三和音の構成</p> <p>第三節 主音から各音度への距離</p> <p>第四節 長短の兩音階の各三和音から其の主音への距離</p> <p>第五章 和聲音の排置</p> <p>第一節 和聲音の各種の排置</p> <p>第二節 密集排置と疎離排置</p> <p>第三節 高聲・低聲の各排置に關する用語</p> <p>第四節 高置と低置 第五節 良好なる和聲音排置</p> <p>第六章 原位三和音の重音省音規則</p> <p>第一節 音を重ねると云ふ事</p> <p>第二節 重音則解説の豫備項</p> <p>第三節 諸家の重音規則通覽</p> <p>第四節 原位三和音の重音省音規則</p> <p>第七章 原位三和音の連合法略解</p> <p>第八章 原位三和音の連合要則</p> <p>第一節 個々の聲部の旋律進行</p> <p>第二節 數聲部によつて生ずる和聲進行</p> <p>第三節 和音の進行</p> <p>第九章 旋律に和聲を附すること</p>	<p>和聲學教科書</p> <p>第一編</p> <p>第一章 音程</p> <p>第二章 音程の二重測定</p> <p>第三章 和音論</p> <p>第四章 長調の副三和音</p> <p>第五章 短音階と其の三和音</p> <p>第六章 三和音の轉回即ち置き換へ</p> <p>第七章 四和音。七の和音</p> <p>第八章 屬七の和音の轉回と其の自然的解決</p> <p>第九章 長調の副七の和音と其の自然的解決</p> <p>第十章 基本位置に於ける長調の七の和音の相互連結。 此等の和音の轉回と其の連結</p> <p>第十一章 短調の副七の和音と其の轉回</p> <p>第十二章 七の和音と他の度及び調の和音との非終止的連結</p> <p>第十三章 副七の和音と他の度及び調の和音との連結</p> <p>第十四章 變化和音。變化せる第五音を有する三和音</p> <p>第十五章 増六の和音、三四の和音及び三五六の和音と 長調及び短調に於ける其の解決</p> <p>第二編</p> <p>第十六章 掛留</p> <p>第十七章 數聲に於ける掛留</p> <p>第十八章 經過音。經過和音。變過音。 オルガン低音</p> <p>第十九章 隱伏八度及び五度。對斜。</p> <p>第二十章 四部作曲に於て定旋律の伴奏に和音を應用すること</p> <p>第二十一章 轉調</p> <p>第二十二章 終止法</p> <p>第二十三章 音樂的傾聽</p> <p>第二十四章 内容と形式</p>
---	---	---

「和聲學通解」では音程の説明は省略されており、第1回は和音について説明されている。後半は掛留や転調について基礎から様々な事例まで記述がある。譜例が豊富で、「和聲學通解」全22回の連載では合計80頁程度の紙幅において267もの譜例が掲載された。

「和聲學通解(22)」の文末(『音楽』3巻10号79頁)には不明点は「参考書」で各自研究するようにと記されている。鳥崎が紹介している「参考書」は次の4冊である。

1. *Die Harmonielehre* von Richter
2. *Lehrbuch der Harmonie* von Jadassohn
3. *Handbuch der Harmonielehre* von Brosig
4. *Lehrbuch der Harmonie* von O. Paul

1と2は「和聲學通解」発表時点ですでに英訳が出版されていたが、4冊はいずれも和訳がなされていなかったため、当時は日本語で読むことができなかった。後述するように、とりわけ1と2は鳥崎が「和聲學通解」執筆後もたびたび多くの日本の作曲家や音楽関係者に参照され、近代日本の和声論の基盤の一部を形成することになった。

2-3. 『新譯律氏和聲學』

『新譯律氏和聲學』は1913(大正2)年に東京帝国大学の学生だった浅田泰順によって翻訳・出版された。原著はエルnst・フリードリヒ・リヒター Ernst Friedrich Richter(1808～1879)の*Das Lehrbuch der Harmonie*である。原著第1版の発刊は1853年であるが、『新譯律氏和聲學』は1894年に刊行された Alfred Richter 増補の第20版に基づく。「自序」(16頁)によれば鳥崎赤太郎の校閲、瀬戸口藤吉や近藤逸五郎の助言を得たという。『新譯律氏和聲學』には原著者の略伝も記載されており、E. F. リヒターがライプツィヒ音楽院でモーリッツ・ハウプトマン Moritz Hauptmann (1792～1868)とともに音楽理論を教えていたことにも言及がある。

E. F. リヒターの和声論は、『新譯律氏和聲學』出版前から日本で参照されていた。例えば1908(明治41)年に発行された『初等和聲學』(福井直秋著、鳥崎赤太郎校)の「例言」にも「リヒテル」への言及がある。『新譯律氏和聲學』出版後は、この訳書を東京音楽学校の学生が参照していたとみられ、草川信の学習ノートに「参考書 エメリー、リヒター」という記述があることから『和聲學初歩』や『新譯律氏和聲學』によって和声学を学習したと考えられている¹⁶。

2-4. 『和聲學教授書』

東京音楽学校学友会発行誌『音楽』で「如蝸子」という筆名を使い充実した和声論を展開させていたのが田中敬一である¹⁷。1920（大正9）年に出版された『和聲學教授書』が『音楽』掲載稿を「多少組織的に改修したもの」であることは、同書「緒言」（2頁）に記載されている。「緒言」（1頁）によれば、本書は「著者が東京音楽学校に於て學び得た處のものに更にリヒター、ヤダスゾーン、プラウト、マクファレン、ゲットシウス等の和聲學者の説を参考して編んだ」ものである。

『和聲學教授書』は、音楽理論そのものについての論考からはじまり、和声学に関する概要が述べられた後に音程や和音の配置へと説明事項が移行してゆく。

2-5. 『和聲學教科書』

乙骨三郎が翻訳した『和聲學教科書』は1929（昭和4）年に大阪開成館から発行された。原著は1883年にライプツィヒで出版されたS. ヤダスゾーンの *Harmonielehre* である。『和聲學教科書』は1897年の *Harmonielehre* 第5版によるもので、1886年にヤダスゾーンが加筆した「王立音楽学校の生徒等に和聲を教授する際に、常に與へた説明や暗示を含んである」（313頁）という「附録」も収録されている。

この訳書が出版される以前にも日本でヤダスゾーンの和声論は参照されており、前項に挙げた田中敬一の『和聲學教授書』を含む複数の日本の和声理論書にヤダスゾーンの名前が散見される。

『和聲學教科書』の「譯者序」に「此の翻譯は今から數年前東京音楽学校生徒の請に應じて着手したもので、當時は單に之を謄寫に附して生徒の研究に便じた」と記されている。この序文には、「近頃洋樂研究の普及に伴つて、此の種の理論書に對する一般の要求漸く加はり、予の同僚友人間にも切りに此書の出版を勧誘する者がある」という当時の状況にも言及がある。

3. 近現代日本において発行された和声理論の著書・訳書

前章では音楽取調掛および東京音楽学校で使用・参照された和声理論書について述べたが、本章では少し視野を広げて19世紀後期から20世紀に日本で発行された和声理論の著書・訳書に注目する。先に述べた和声理論書の歴史的位置づけを検討するためにも、近代から現代に至る日本の和声理論教育の潮流を概観するためにも、いつ頃どのような和声理論の著書・訳書が出版されていたのかを確認しておくことは重要であると考えられる。

【表2】は、国立国会図書館サーチおよび国立情報学研究所のCiNii Booksで「和声」をキーワードとして検索し、本論文の考察対象時期である19世紀後期から20世紀の出版物141件のデータを抽出してまとめたものである。本研究において作成した【表2】には和声学に関

近代日本における音楽理論教育と和声理論書出版の歴史的展開

【表2】 19世紀後期から20世紀における日本の和声理論書一覧

著者・編者	訳者	書名	出版社	出版年
ステファン・エメリー	神津仙(専)三郎訳講	和聲学初歩	普及舎	1896
福井直秋著；島崎赤太郎関	-	初等和聲学	共益商社書店	1908
Ernst Friedr. Richter 著； Alfred Richter 増補	浅田泰順補訳	新譯律氏和聲学	浅田泰順	1913
山田耕筰	-	近世和聲学講話	大阪開成館	1918
田中敬一	-	和聲学教授書	松邑三松堂	1920
福井直秋	-	和聲学教科書	共益商社書店	1921
黒澤隆朝編著	-	和聲学	敬文館	1927
中田章	-	基本和聲学	共益商社書店	1927
マックス・レーガー	片山頼太郎訳	轉調法の作例解説	高井樂器店	1928
ザーロモン・ヤードスゾーン	乙骨三郎訳	和聲学教科書	大阪開成館	1929
アーノルト・シェンベルク	山根銀二訳	和聲学	讀者の為の翻譯社	1929
ヤードスゾーン著；島崎赤太郎案； 共益商社書店編輯部編	-	例題の鍵；ヤードスゾーン著 和聲学教科書	共益商社書店	1930
リムスキー・コルサコフ	菅原明朗訳註	和聲学要義	春陽堂	1931
下總皖一	-	和聲学実習課題例解	共益商社書店	1931
ステファン・クレール	片山頼太郎訳	和聲学	高井樂器店、 日本樂器會社出版部	1932
下總皖一	-	音楽教育と和聲学	日本放送出版協會	1932
池讓	-	和聲法：(四聲樂句法の基準)	春秋社	1933
山田耕筰	-	和聲学・作曲法	文藝春秋社	1933
H.A.Miller	門馬直衛訳	近代和聲論	春秋社	1934
眞篠俊雄編	-	和聲の実習問題	東洋圖書	1934
門馬直衛	-	和聲の話	新興音楽出版社	1934
下總皖一	-	和聲学	共益商社書店	1935
音楽世界社編	-	和聲学	音楽世界社	1935
原田彦四郎、守安省編	-	歌謡作曲文檢受験獨習和聲学	共益商社書店	1935
成田為三	-	和聲学	六星館	1935
R.O.モリス	長島卓二訳註	和聲学と對位法の基礎	音楽書房	1935
エー・エーチ・ハミルトン夫人	教文館訳編	鍵盤上の和聲学と移調法：準備勉強	教文館出版部	1936
リムスキー・コルサコフ	服部龍太郎訳	和聲法実習	春陽堂	1936
小松耕輔	-	和聲学講義	日本大學出版部	1936
山田耕筰	-	和聲樂及作曲法	清教社	1937
呉泰次郎	-	轉調論	共益商社書店	1938
浅木夢二	-	和聲学の実習	シンフォニー楽譜出版社	1938
田中正平	-	日本和聲の基礎	創元社	1940
A. イーグルフィールド・ハル	小松清訳	近代和聲学の説明と應用	創元社	1940
坊田壽眞	-	日本旋律と和聲	厚生閣	1941
ヴァンサン・ダンディ	池内友次郎訳	作曲法講義	古賀書店	1941-43
諸井三郎	-	機能と和聲法	古賀書店	1942
下總皖一	-	音楽教育と和聲学	日本放送出版協會	1942
小松耕輔	-	國民學校教師の為の音楽理論と和聲学	共益商社書店	1942
小松耕輔	-	和聲学	春秋社	1942
テオドル・デュボア	平尾貴四男訳	和聲学	創元社	1942
荒越彦	-	問答和聲学	白眉学芸社	1943
池讓	-	和聲学研究	新興音楽出版社	1943
溝部國光	-	和聲学教本	[溝部國光]	1945
森義八郎	-	解りやすい和聲の話	白眉社	1947
橋本國彦	-	旋律の作曲法：豊富な楽譜と和聲の講義を含めた	全音楽譜出版社	1948
下總皖一	-	和聲学	樂友社	1948
小松耕輔	-	和聲学	全音楽譜出版社	1948
下總皖一	-	和聲学：教科書	東京音楽學校同聲會	1949
下總皖一	-	和聲法の要領（作曲の技法）	婦人画報社	1949
下總皖一	-	和聲学実習課題と例解	音楽之友社	1949
池内友次郎	-	和聲法講義	教育出版	1950-51
下總皖一	-	標準和聲学	音楽之友社	1950

東京藝術大学音楽学部紀要 第48集

著者・編者	訳者	書名	出版社	出版年
長谷川良夫	-	大和聲学教程：機能理論に基づく和聲運用の實技	音楽之友社	1950
パウロ・ヒンデミット	坂本良隆訳	和声学	音楽之友社	1952-65
長谷川良夫	-	和声学入門	音楽之友社	1952
岩上行忍	-	基礎和声法：付・練習課題とその例解	全音楽譜出版社	1953-55
ルードウィヒ・トウイレ、 ルードルフ・ルイ	山根銀二、渡鏡子訳	和声学	音楽之友社	1954
松平頼則	-	近代和声学	音楽之友社	1955
ウォルター・ピストン	倉島俊夫訳	ピストン和声学	創元社	1956
下總皖一	-	和声法新書	音楽之友社	1957
中田喜直	-	実用和声学：旋律と和音の関係	音楽之友社	1957
リヒャルト・シュテール	尾高尚忠訳編	和声法	全音楽譜出版社	1958
外崎幹二、島岡譲	-	和声の原理と実習	音楽之友社	1958
池内友次郎	-	和声の基礎	全音楽譜出版社	1959
子供のための音楽教室 編	-	子供のための和声聴音： ハーモニーのかきとり	音楽之友社	1959
バラム・ジョンソン	今井円治訳	鍵盤和声の練習	音楽之友社	1960
池内友次郎	-	和声の展開	全音楽譜出版社	1961
R.O. モリス	今井円治訳	鍵盤による数字つき和声	音楽之友社	1961
佐々木宣男、町田等 共編	-	基礎和声学	全音楽譜出版社	1961
永見貞三	-	旋律による二声音和声	音楽之友社	1961
シャルル・ケックラン	清水脩訳	和声の変遷	音楽之友社	1962
ヴァインセント・パーシケッティ	水野久一郎訳	20世紀の和声法：作曲の理論と実際	音楽之友社	1963
有賀正助	-	和声概論	音楽教育研究協会	1963
菅原明朗	-	ピアノのための和声	音楽之友社	1964
島岡譲執筆責任	-	和声：理論と実習	音楽之友社	1964-67
島岡譲	-	和声と楽式のアナリゼ：バイエルからソナタアルバムまで	音楽之友社	1964
池内友次郎	-	和音外音	音楽之友社	1965
小船幸次郎	-	演奏者のためのギター和声学	全音楽譜出版社	1965
石黒脩三	-	和声学：解説と課題	全音楽譜出版社	1965-67
池内友次郎	-	和音構成音	音楽之友社	1966-81
坊田寿真	-	日本旋律と和声	音楽之友社	1966
成田剛	-	鍵盤楽器のための和声学	音楽之友社	1967
アミー・ドメル・ディエニー	森井恵美子訳	生きている和声：調性的和声	音楽之友社	1967
加藤直ほか著	-	和声学入門：初心者のための	カワイ楽譜	1967
アルノルト・シェンベルク	上田昭訳	和声法	音楽之友社	1968
ジョージ・ウェッジ	板野平訳	鍵盤上の和声	国立音楽大学	1968
オリヴィエ・アラン	永富正之、二宮正之共訳	和声の歴史	白水社	1969
川原浩	-	実用鍵盤和声	音楽之友社	1969
矢代秋雄、竹内剛	-	和声法とその応用	ヤマハ音楽振興会	1970
萩原英彦	-	和声法の研究	龍吟社	197-
小橋稔	-	和声学	ドレミ楽譜出版社	1971
青山梓編著	-	やさしい和声学入門	音楽春秋	1972
白井威彦、草ヶ谷万喜共著	-	応用和声学	音楽教育社	1972
成田為三	-	初等和声学	ドレミ楽譜出版社	1973
岡本敏明、西崎嘉太郎増補	-	-	-	-
田村しげる	-	やさしい和声の話	新興楽譜出版社	1973
岩田均	-	やさしい和声入門：ギターで学べる	ドレミ楽譜出版社	1974
外崎幹二	-	和声の分析	音楽之友社	1974
小船幸次郎	-	ギターをひきながら学ぶ和声学	音楽之友社	1974
青山梓	-	やさしい和声学入門	音楽春秋	1975
福島淳、白兼啓子共著	-	幼児教育のための実用鍵盤和声	音楽之友社	1976
物部一郎	-	和声の理論と実習	福田楽譜	1977
テオドル・デュボワ	平尾貴四男訳； 矢代秋雄校訂・増補	和声学	音楽之友社	1978
エドモン・コステール	小宮徳文訳	和声の変貌：音高組織の論理	音楽之友社	1980
成田剛	-	鍵盤和声のたのしみ	音楽之友社	1980

近代日本における音楽理論教育と和声理論書出版の歴史的展開

著者・編者	訳者	書名	出版社	出版年
山口庄司	-	四和声理論：べき倍音列と日本伝統音階比較による和声根拠の研究	アカデミア・ミュージック	1980
竹内剛編著	-	和声の原理： その総合的なしくみと展開	ヤマハ音楽振興会	1980
石居庸介	-	和声学基礎とその応用： 伴奏の作り方から対位法まで	国際音楽学校	1981
寺岡宏治	-	初心者のための実践への和声と展開	栄光出版社	1981
J. モルバン	吉田雅夫, 川竹英克訳	器楽演奏家に必要な和声の基本と和声分析	シンフォニア	1981
岡田昌大	-	実用的和声法： 理論および実習と応用	音楽之友社	1982
竹内剛, 菅野真子編著	-	新ハーモニー入門	ヤマハ音楽振興会	1982
矢代秋雄	-	矢代秋雄和声集成	音楽譜出版社	1982
マルセル・ピッチュ	飯島英嗣訳	調性和声概要	A. ルデュック社	1984
塩澤修三	-	鍵盤楽器のためのジャズ和声	音楽之友社	1984
アンジェラ・ディラー	大倉景子, 三木邦子訳	鍵盤和声入門	新芸術社	1984
ヘルベルト・ノービス, 佐々木忠共著	田代城治訳	ゲネラルバスから機能理論まで 新しいギター和声学	全音楽譜出版社	1985
物部一郎	-	創作和声：理論と実習	音楽之友社	1985
箕作秋吉著, 小山郁之進編	-	和声体系発展の史的概観と 日本・東洋の和声論	思文閣出版	1985
ジョージ・ウェッジ	板野平, 花村光浩訳	応用和声	国立音楽大学	1987
池内友次郎編	-	和声課題集	音楽之友社	1989
池内友次郎編	-	和声実施集	音楽之友社	1989-90
イヴォンヌ・デポルト, アラン・ベルノー	永富正之, 永富和子訳	和声法：基礎理論 大作曲家の和声様式	日仏音楽出版	1990
野田暉行	-	和声 50 課題集	音楽之友社	1990
セツ矢博資, 嵐野英彦, 北浦恒人共著	-	和声法：基本とその応用	レッスンの友社	1991
河江一仁	-	新和声法教程	河江一仁	1991
竹内剛, 菅野真子編著	-	和声法	ヤマハ音楽振興会	1991
ライナー・パウマン	須江康司訳	ロックのための和声学：理論と実践	東亜音楽社	1991
原博	-	実力養成のための和声実習 110 課題集	全音楽譜出版社	1991
伊藤辰雄	-	色彩豊かな和声をつけるために	東亜音楽社	1992
飯島英嗣編	-	和声の実習と要点：武蔵野音楽大学入 学試験和声課題による	音楽之友社	1993
江頭賢三編著	-	和声の学び方	音楽之友社	1993
西谷玲	-	実用的な鍵盤和声実習書	音楽之友社	1994
ルートヴィヒ・カール・ヴェーバー	田中邦彦訳	演奏のための和声法入門： 理論・実践・解答	シンフォニア	1994
池本武	-	和声学	全音楽譜出版社	1994
ヴァルター・コルネダー	小沢和子訳	弦楽器と旋律楽器奏者の和声学	シンフォニア	1995
小山清茂, 中西覚共著	-	日本和声：日本の音を求めて：そのし くみと編・作曲へのアプローチ	音楽之友社	1996
島岡譲 ほか	-	総合和声：実技・分析・原理	音楽之友社	1998
ジークフリート・ボリス	田中邦彦, 永田孝信訳	和声法：考え方・学び方・解き方	シンフォニア	1999
香取良彦	-	絶対わかる！ポピュラー和声	リットーミュージック	1999
川島博編著	-	和声学ワーク	全音楽譜出版社	1999

する理論書を記載しているが、音楽通論や作曲法に関する書籍の中で部分的に扱われている和声学については表に反映されていない。また、【表2】に記入した情報は図書のみであり、雑誌等の記事については記載していない。今回は重版や改訂版を割愛し、初版の書誌情報のみを掲載している。

明治後期には少なかった和声論の著書・訳書は、昭和初期すなわち1930年代に入ると増加してゆき、日本人による著書も記述内容が充実してくる。

なお、今回は和声の理論書に注目したため表には記載しなかったが、和声の学び方や特定の作曲家・作品の和声研究も1930年代以降から多くなっていった。また、本論文では19～20世紀に焦点を絞ったが、21世紀以降あるいは今日も和声に関する書籍が発行され続けていることは言うまでもない。

3-1. 著者・訳者について

本論文で提示した【表1】および【表2】を鳥瞰してみると、明治後期の和声理論書を考察するうえで、鳥崎赤太郎の影響が大きかったことが指摘できる。鳥崎は、自身の著述の他に『初等和声学』や『新譯律氏和声学』の校閲もおこなっている。また、東京音楽学校で教員を務めて複数の和声理論書の著書や訳書を手がけた福井直秋や片山穎太郎も鳥崎赤太郎に師事している。明治40年代の東京音楽学校における試験問題でも鳥崎赤太郎の出題が確認できる¹⁸。

音楽取調掛では設立当初にアメリカ人のL. W. メーソンやS. エメリーによる和声論が指導されていたが、メーソンの後任としてF. エッケルトが着任して鳥崎赤太郎のようにドイツ留学経験者が指導者となった東京音楽学校ではS. ヤーダスゾーン等の和声論が教育上の主軸をなしていった。

また、1930～40年代に多数の和声理論書を出版した作曲家に下総皖一がいる。下総はベルリンでパウル・ヒンデミット Paul Hindemith (1895～1963) に師事しており、著書『和声学』（共益商社書店、1935年）等でもP. ヒンデミットの和声論を紹介している。下総は東京音楽学校で教員をしていたため、松本民之助をはじめとする後続の和声理論書の著者にも影響を及ぼした。

このように、明確に目視できない音楽理論の教育・受容の系譜が近現代日本の音楽史の根底にあることも今一度確認しておきたい。

3-2. 参照されてきた原著

【表2】からも明らかであるように、1908（明治41）年に出版された『初等和声学』（福井直秋著、鳥崎赤太郎校）を嚆矢に、日本人の手になる和声理論書が次々に出版された。本項では、明治後期から太平洋戦争前に執筆された日本人の和声理論書に関して、特に参照さ

近代日本における音楽理論教育と和声理論書出版の歴史的展開

れてきた欧米の文献に着目することで近代日本における欧米の和声理論の受容状況について明らかにする。

今回調査した22冊で参照された文献およびその原著者については【表3】にまとめた。なお、「参考文献・著者名」の表記は各資料に記載されている通りに転載した。

実際には参照した文献があっても書名や著者を明記していない場合があることは考慮に入れる必要があるが、20世紀前半を通してE. F. リヒターやS. ヤダズゾーンの著書が参照されていたこと、およびそれと対象的にジャン＝フィリップ・ラモー Jean-Philippe Rameau (1683～1764)、ジャン・ル・ロン・ダランベール Jean Le Rond d'Alembert (1717～1783)、フォランソワ＝ジョゼフ・フェティス François-Joseph Fétis (1784～1871) 等、

【表3】 近代日本の和声理論書における参考文献

著者	書名	参考文献・著者名、掲載頁	出版社	出版年
福井直秋(著)、 島崎赤太郎(関)	初等和聲學	リヒテル、ステナー、プスレル、ブラウト、 エメリー(例言)	共益商社書店	1908
山田耕作	近世和聲學講話	M. Hauptmann (111頁)	大阪開成館	1918
田中敬一	和聲學教授書	リヒター(緒言、134、201、207、209、211頁)、 ヤダズゾーン(緒言、20、91、134、139、188、 201、206、208、210頁)、ブラウト(緒言、97、 117、142、143、156、184、207頁)、マクファ レン(緒言、183頁)、ゲットシウス(緒言、 66、114、141、144、154頁)、リーマン(16頁)、 バークハースト(67、136、201、204、217、224 頁)、ジョンソン(117頁)、マクファーツン(136 頁)、アンガー(111、142頁)、エメリー(114、 220頁)、カーエン(115、135頁)、ハーバート(117 頁)、パーテンショー(135頁)、シン(137頁)、 ヴァンサン(220頁)、ガウ(94、218頁)	松邑三松堂	1920
福井直秋	和聲學教科書	ヤダズゾーン(1・166頁)、リヒテル(1頁・ 19・281頁)、ウェーベル(18頁)、シュナイデ ル(19頁)、ドンメル、プスレル、プローズィッ ヒ(166頁)	共益商社書店	1921
黒澤隆朝(編著)	和聲學	ヤダズゾーン、リヒター(序文・71頁)、ウェ ーバー、リーマン(71頁)	敬文館	1927
中田章	基本和聲學	記載なし	共益商社書店	1927
下總皖一	和聲學實習課題例解	記載なし	共益商社書店	1931
池譲	和聲法：四聲樂句法の基準	記載なし	春秋社	1933
山田耕作	和聲學・作曲法	レオポルド・カルル・ヴォルフ(序)	文藝春秋社	1933
眞篠俊雄編	和聲の實習問題	リヒテル、エメリー、ヤダズゾーン(はしがき)	東洋圖書	1934
門馬直衛	和聲の話	ヴェーバー(41頁)、クレール、リーマン(42頁)	新興音楽出版社	1934(41)
下總皖一	和聲學	ヒンデミット(序、248、249頁)、ラモー(41頁)	共益商社書店	1935
音楽世界社編	和聲學	ヤダズゾーン、リヒター(序文、71頁)、ウェ ーバー、リーマン、ゲッシユース(71頁)	音楽世界社	1935
原田彦四郎、 守安省編	歌謡作曲文檢受驗獨習和聲學	記載なし	共益商社書店	1935
成田為三	和聲學	記載なし	六星館	1935
浅木夢二	和聲學の實習	記載なし	シンフォニー楽譜出版社	1938
田中正平	日本和聲の基礎	記載なし	創元社	1940
坊田壽眞	日本旋律と和聲	記載なし	厚生閣	1941
諸井三郎	機能と和聲法	ルイス、デュイレ(緒言)、ツァルリーノ(1頁)、 ウェーバー、ハウプトマン、リーマン(2頁)	古賀書店	1942
下總皖一	音楽教育と和聲學	記載なし	日本放送出版協会	1942
小松耕輔	國民學校教師の為の音楽理論と和聲學	記載なし	共益商社書店	1942
小松耕輔	和聲學	E. F. Richter, <i>Harmonielehre</i> . S. Jadassohn, <i>Harmonielehre</i> . A. Savard, <i>Manuel d'Harmonie</i> . Th. Dubois, <i>Traité d'Harmonie</i> . H. Riemann, <i>Manuel de l'Harmonie</i> . E. Prout, <i>Harmony</i> . G. W. Chadwick - <i>Harmony</i> . (緒言)	春秋社	1942

ドイツ以外の重要な和声理論の著者はほとんど見受けられないことが指摘できる¹⁹。

3-3. 和声学を巡る用語

前項では日本人による著書に着目したが、ここからは訳書に視点を移す。欧米の和声理論を取り入れるにあたっては概念や用語の整理が必要となる。その過程で訳語が変容していったことも重要な論点である。

本論文第1章の【表1】で明治後期から昭和初期の和声学の著書・訳書のうち5冊の目次を確認したが、それらを鳥瞰してみても「静止法」「疎開和声」といった今日ほぼ使用しない用語が散見される。「静止法」は終止法、「疎開和声」は開離配置による和声、というように、これらは概ね漢字から予想される通りの用語である。

一方で、明治期から昭和初期の和声理論に関する著書・訳書でたびたび使用されている「和絃」という用語には注意が必要である。「和音」とほぼ同義で用いられることもある概念であるが、明治～大正期の使用事例を参照すると、和音よりもやや広義に和声の音響を捉えて三音の重なりと【譜例1】のバスも含めた四音の重なりに「和絃」という語が適用されていること、および和音の役割・機能を説明する際に「和絃」が使用される傾向にあることがわかる。1891（明治24）年発行の『音楽綱要』には、「和絃ハ和聲上ヨリ生ズル諸音ノ連合ニシテ二個已上ノ旋律ノ同時ニ響クモノヲ云フ」と記されている²⁰。また、「和聲」に「二個若クハ數個ノ旋律相合シテ同時ニ響ク」という説明を付している『新撰樂典大要』には「和聲ノ原理ニ基ヅキ種々ナル音ヲ適宜ニ聯合シテ樂曲ヲ構成スル所ノ基礎トナルモノハ之ヲ名ケテ和絃ト云フ」という記載がある²¹。前述した『和聲學初歩』では「和絃ノ下ニ記シタル羅馬數字ハ三和音ヲ構成シタル位置ニ係リ音階ノ度ヲ指示ス」という記載とともに以下の【譜例1】が掲載されており²²、「和音」と「和絃」がそれぞれ区別されていたと考えられる。

【譜例1】『和聲學初歩』21頁掲載の「第一図」



上記のように、明治期の著書・訳書では「和絃」と「和音」がともに用いられていたが、やがて「和絃」は「和音」に吸収・同化されていった。例えば、福井直秋の著書『初等和聲學』の初版と「修訂増補」版を比較参照すると、1908（明治41）発行の初版で「普通和絃（三和音）」（13頁）と記載されていた部分が1924（大正13）年発行の「修訂増補」第7版では「普通和音（三和音）」（14頁）と変更されている。

おわりに

本論文では、近代日本の音楽理論教育の草創期について、音楽取調掛・東京音楽学校の和声教育を軸に詳述してきた。音楽取調掛の記録によれば、1881（明治14）年のカリキュラムにおいてすでに和声学が取り入れられていた。開学期から和声学が教育課程に含まれていたことは、1907（明治40）年設立の東洋音楽学校をはじめとした私立の音楽学校でも同様である。

音楽取調掛では当初、L. W. メーソンによる和声学が教授され、S. エメリーの著書 *Elements of Harmony* が翻訳・活用されていたことから、和声学にもアメリカの音楽教育が導入されることになった。その後、明治40年代からはS. ヤーダスゾーンやE. F. リヒターの和声論の参照頻度が高まってゆく。その契機をつくった一人が島崎赤太郎であった。

本論文では19世紀後期から20世紀に日本で出版された和声理論書を一覧化し、音楽取調掛・東京音楽学校における和声教育の背景を確認するとともに、初期の出版物で参照されていた欧米の和声理論書も明らかにした。その際にドイツの和声学の影響が大きいことを指摘したが、音楽取調掛・東京音楽学校の諸科目の試験問題²³を参照すると、フランス等ドイツ以外の音楽についても教育内容に含まれていたことがわかる点を追記しておく。

今後の展望として、本研究のさらなる推進により、近代日本の音楽教育において音楽理論がどのように教授されてきたのか、和声教育史がどのように形成されてきたのかを歴史学的かつ実証的に解明できると考えられる。一方で、研究を進めるうえで課題も浮き彫りとなった。例えば、教材の使用状況を追究することや、和声学を対位法や作曲法と関連づけて考察すること、今回考察対象とした和声理論書がどのように実践と連結するのかを検討することなどが今後の課題として挙げられる。今後は個々の教材や理論書の比較考察も視野に入れながら、近代日本における欧米の音楽理論受容とあわせて教育実態をさらに解明してゆくことが求められる。

附記

本研究はサントリー文化財団「若手研究者のためのチャレンジ研究助成」を受けたものです。

注

- 1 明治時代の音楽用語の翻訳に関する先行研究として、塚原康子の著書『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』（多賀出版、1993年）や上田真樹の博士論文「明治初期における西洋音楽用

- 語の創成——瀧村小太郎と音楽取調掛——」（東京藝術大学、ソルフェージュ、博音第111号、2007年）がある。翻訳の過程や参考文献が挙げられており大変参考になるが、本論文の考察対象である「和絃」等の和声に関する用語への言及は多くない。
- 2 Claude Victor Palisca（角倉一郎、片山千佳子、土田英三郎）「音楽理論」『ニューグローヴ世界音楽大事典』第4巻、平凡社、1994年、228～242頁。
 - 3 東京藝術大学附属図書館所蔵の『明治十四年 音監開申書類』（音楽取調掛時代文書綴 巻13）「音楽取調掛報告」に「長年生」は「速成音楽師範生ニシテ来ル明治十五年二月ヲ期シ其業ヲ卒ヘ音楽教員ノ需メニ應ゼシムル目途ナリ」、「少年生」については「猶多年ノ後ヲ期シテ音楽伝習ヲ完成セシムル者トス」と記されているが、入学要件の記載はない。
 - 4 東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会編、武石みどり監修『音楽教育の礎——鈴木米次郎と東洋音楽学校』春秋社、2007年、234～235頁。
 - 5 大阪音楽大学70年史編集委員会編『大阪音楽大学70年史——楽のまなびや』大阪音楽大学、1991年、82～83頁。なお、同書81頁によれば1933（昭和8）年2月制定の「大阪音楽学校規則」に記載されている学科は本科、専攻科、高等科、師範科、研究科、特別専門科、幼稚園保姆養成科、選科、特別選科である。大阪音楽学校の創設者である永井幸次については鎌谷静男の著書『琥珀のフーガ——永井幸次論考』（音楽之友社、1998年）に詳述されている。
 - 6 東京藝術大学附属図書館所蔵の『明治十四年 音監開申書類』（音楽取調掛時代文書綴 巻13）参照。同書類によれば、和声学の講義内容は「三和音轉回法及諸和絃進行ノ理等」である。
 - 7 東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究』音楽之友社、1976年、374頁。なお『西洋音楽調和要法』は瀧村小太郎により1882（明治15）年に翻訳された。
 - 8 藤原義久「和声学事始：メーソンの和声学教育に関する新資料紹介」『哲学会誌』7、1982年、9頁。中村理平『洋楽導入者の軌跡——日本近代洋楽史序説』刀水書房、1993年、520頁。
 - 9 L.W. メーソンの和声指導の一端は、彼の講義を受けた音楽取調掛伝習生の中村専のノートに見ることができる。英語で綴られた中村のノート記載内容は『東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』音楽之友社、1987年、65～88頁に掲載されている。
 - 10 1982（昭和57）年度科学研究費補助金 総合研究（A）の研究成果報告書『日本近代芸術教育史の資料的研究』（研究代表者 山川武、課題番号57312003）1984年、36頁。
 - 11 仲辻真帆「1930年代の東京音楽学校における作曲教育と『歌曲』創作：近代日本音楽史観の再構築にむけて」東京藝術大学博士論文、博士（音楽学）甲第907号、2018年。
 - 12 神津の名前は「専三郎」と記されることが多いが、この『和聲學初歩』の表紙および奥付には「仙三郎」と表記されている。
 - 13 森田信一・松本清「日本における和声理論教育の歴史」『音楽教育史研究』11、2008年、78頁。
 - 14 『音楽』は1910（明治43）年1月から1922（大正11）年11月まで発行された月刊誌で、いっ

たん廃刊となった後、1923（大正12）年に「第1号」として復刊して1940（昭和15）年1月まで続いた。

- 15 鈴木治「島崎赤太郎研究序説——唱歌・音楽教育からのアプローチを試みる——」『礼拝音楽研究』第11号、キリスト教礼拝音楽学会 学会誌編集委員会、2012年3月、20頁。なお、この論文に『音楽』所収の「和声学通解」に関する考察は記載されていない。
- 16 森田信一、松本清「草川信の音楽作品の成り立ち——生涯と音楽的背景および作曲法の特徴——」『富山大学人間発達科学部紀要』第1巻第1号、2006年、251頁。
- 17 田中敬一「緒言」『和声学教授書』松邑三松堂、1920年、2頁。
- 18 東京藝術大学音楽総合研究センター大学史料室所蔵の『明治四十年三月 各科学年試験成績』『明治四十一年三月 各科学年試験成績』『明治四十二年三月 学年試験成績』『明治四十三年三月 学年試験成績』『明治四十四年三月 各科学年試験成績』『明治四十五年 各科学年試験成績』等において島崎赤太郎の出題が確認できる。
- 19 『楽典』（J. カルコット著、神津元訳、神津専三郎校訂、1883年）等にはJ.-Ph. ラモーらの名前が散見され、実際には早い時期からフランスの音楽理論書も参照されていたことが確認できる。
- 20 鷹野該吉編、奥好義閲『音楽綱要』寛裕舎、1894年、42頁。
- 21 石原重雄『新撰楽典大要』富山房、1896年、79頁。
- 22 ステファン・エメリー著、神津仙三郎訳講、上真行、辻則承筆記『和声学初歩』普及舎、1896年、20～21頁。譜例は国立国会図書館デジタルコレクションより転載。なお、Ⅶの右上にある小さな丸印は減三和音を意味する。
- 23 東京藝術大学附属図書館および同大学音楽総合研究センター大学史料室所蔵。

Historical Development of Music Theory Education and Publication of Harmony Theory Books in Modern Japan: Based in Harmony Education at Tokyo Academy of Music

NAKATSUJI Maho

Professional music educational institutions were established throughout Japan, including Tokyo Academy of Music (est. 1887, Tokyo Ongaku Gakkō), after the Institute for Musical Investigation (Ongaku torishirabe-gakari) was set up in 1879. Researchers are working on historical studies covering the philosophy and activities of founders, for example Toyo Conservatory of Music (est. 1907, currently Tokyo College of Music) and the Osaka School of Music (est. 1915, currently Osaka College of Music). This research focuses on the teaching materials and education methods that were actually used in those music schools from the Meiji period to the early Showa period. While there are many studies regarding songs and instrumental music, there are few detailed studies that focus on music theory. Therefore, this study investigates the actual situation of music theory education at the Institute for Musical Investigation and Tokyo Academy of Music, while also referring to the educational contents of other music schools at that time.

The following publications released in 1883 and 1884 by the Institute for Musical Investigation are relatively well known: Ongaku Mondō (Catechism of Music), Gakuten (Musical Grammar), and Ongaku Shinan (The National Music Teacher). For example, *The Trajectory to the Establishment of Music Education* (1976) described the background of Ongaku Mondō as well as the involvement of translator Kotarō Takimura and editor Senzaburō Kōzu. This study refers to these materials and examines the differences in translations and descriptions, as well as confirms the texts including other music theory books. For further consideration, this research focuses on books about harmony theory, including *Waseigaku Shoho* (Elementary Harmony), and presents a list of harmony theory books (including translations) published from the Meiji period to the early Showa period, and also clarifies the educational backgrounds and friendships of the authors and translators. This research can contribute to elucidating historically and empirically how music theory has been taught in modern Japanese music education and how the history of harmony education has been formed.